

2010年9月1日

# 群馬大学「多文化共生教育・研究プロジェクト(PCDC)」の活動に参加して

---

ー活動を通して学んだ日本とブラジルの文化の違いー

群馬大学・教育学部  
学籍番号：09187001 氏名：ハラ・スザナ・ナオミ  
連絡先：hara.suzana@gmail.com

## 1. はじめに

現在、国境を越えて移動する人の数が多く、日本も外国人を徐々に受け入れている。群馬県の場合は、ブラジル人労働者が多く滞在している地域がある。それは太田市と大泉町である。その地域の外国人子弟の支援のために、群馬大学に「多文化共生教育・研究プロジェクト（PCDC）」が設立された。

私は2009年10月から2010年8月まで、サンパウロ大学から「日本語・日本文化研修生」として日本に来て、群馬大学の「多文化共生教育・研究プロジェクト（PCDC）」グループのメンバーと様々なボランティア活動に参加した。「多文化共生のまちづくりー学生のための仕事術ー」という授業も受け、この授業でもボランティア活動を体験した。

本稿では、まず文化について述べ、在日ブラジル人労働者のことを簡単に説明し、群馬大学の先生方、学生が行っているボランティア活動で体験したことを挙げながら日本とブラジルの文化の違いについて論じる。その上で、文化の違いで起こる問題とその解決方法を導く。

## 2. 文化とは

『異文化コミュニケーションワークブック』によれば文化について、次のように述べられている。

文化とは、ある手段のメンバーによって幾世代にも渡って獲得され蓄積された知識、経験、信念、価値観、態度、社会階層、宗教、役割、時間・空間関係、宇宙観、物質所有観といった諸相の集大成であるといえよう。1)

続いて、この本は文化を氷山にたとえている。それは、文化は氷山のように上の見える部分と、普通意識されていない隠れている大きい部分があるからだと言われている。例えば、見える部分は、言語、音楽、料理、住居などであり、見えない部分は、価値観、意思決定方式、問題解決の方法、コミュニケーション・スタイル、表情、アイコンタクト、意識、友情についての概念などである。

これから、参加したボランティア活動の中から、実際には見える文化と見えない文化が意識できたかどうか述べながら、日本とブラジルの違いについて紹介する。

## 3. ブラジル人労働者の子どもの現状

『日本で学ぶ国際関係論』によれば外国人について、次のように述べられている。

現在の外国人登録者の国籍による内訳の上位を見てみると、韓国・朝鮮籍 59 万 8000 人（全登録者の 29.8%）、中国籍 51 万 9000 人（25.8%）、ブラジル籍 30 万 2000 人（15%）。<sup>2)</sup>

中国と韓国人はオールドカマーと呼ばれ、歴史的な理由で日本に在留している。一方、ニューカマーのブラジル人やペルー人は日系人であり、労働者として滞在している。

ブラジル人労働者というのは、90 年代に外国人労働者の受け入れが日系人に限られたことで、日本で働くことが可能になった人々である。受け入れが限定された背景には、バブル期にアジアからの不法労働者の人口が増加したことと、人手不足の問題があった。

中川（1998）によると日系人には長期滞在が認められ、就労に制約がないので、子どもを含め家族の皆と来日することが増加したという。<sup>3)</sup>

しかし、この説明に対しては、文化的な理由を無視しているという点で問題がある。ブラジルの文化においては父親が家族と一緒に暮らさずに、単身赴任して一人で遠くで暮らすことは日本より少ない。一般的なブラジル人にとって親が引越しすることになると家族皆が一緒に行くのは当然だと言える。

ブラジル人は子どもを私立の在日ブラジル人学校に通わせるか、日本の学校に通わせるかどちらかを選択できるが、多くのケースでは子どもの将来に役立つ言語が重要な点とされず、お金がかかるかどうかという理由で決められている。

まず、在日ブラジル人学校はどんな学校なのか、簡単に説明する。ウィキペディアによると在日ブラジル人学校について、次のように述べられている。

日本国内にはブラジル政府が認可するブラジル人学校も存在するが、それらの学校は「アメリカンスクール」や「独逸学園」、「朝鮮学校」をはじめとする多くの外国人学校と同じくブラジル人向けのナショナルスクール扱いであり、日本の文部科学省の学習指導要領に沿った教育を行わないことから、日本の学校教育法に基づく学校制度においては「各種学校」扱いとなる。このため、文部科学省からの各種支援がない他、日本の小学校や中学校、高等学校の卒業資格は得ることができない。さらにこれらの学校は学費がとても高額である。<sup>4)</sup>

日本全国では 47 校のブラジル人学校がブラジルの文部科学省から承認されていて、12 校の学校はまだ現在承認作業が進行中であると言われている。

群馬における承認された学校は次の 5 校である：

大泉町の

Instituto Educacional Centro Nippo-Brasileiro（小・中・高校）

Escola da Professora Rebeca（小・中学）

Instituto Educacional Gente Miúda（小・中・高校）

太田市の

Colégio Pitágoras Brasil (小・中・高校)

Escola Paralelo (小・中学)

現在承認作業が進行中の学校は次の2校である：

大泉町の

Escola da Professora Rebeca (高校)

太田市の

Centro Educacional Lisieux (小・中学)

外国人の学校は日本の学校と制度が違い、日本の学校と子どもの扱い方が違う。群馬県の場合は、群馬大学の多文化共生教育・研究プロジェクト(PCDC)が外国人のために様々な活動をしている。

#### 4. 多文化共生教育・研究プロジェクト(PCDC)とは

2002年に設立され、群馬県の外国人労働者の子どもを対象として、様々なボランティア活動を行っている。主な活動は子どもの健康を目指す健康診断、体力測定、健康啓発である。それ以外に、JIAM「地域の外国人児童・生徒への支援セミナー」、群馬大学地域貢献活動学生協力者養成講座、教員研修連続ワークショップ、多文化共生インターンシップ、だんべえ踊りなどが行われている。

多くのメンバーは教育学部、社会情報、医学部の学生である。リーダーはいなくて、毎回新しい活動があるとき、新しい学生がリーダーの役をする。グループが集まるのは教育学部の教室で、毎週月曜日のお昼ご飯の時間だ。活動の作業があるときは空いている時間を使う。

次に私が参加した健康診断と体力測定に関する活動の作業について述べる。

#### 5. 健康診断と体力測定

健康診断は日本の学校では国が行っているが、在日ブラジル人学校は日本の学校と制度が違い、国でやってもらえないので、2002年から群馬大学のPCDCが一年に一回ボランティアとしてこの作業を担当している。群馬大学医学部教員や保健師を中心に、PCDCのボランティア、保険福祉事務所と市町村の方々の支援を受け、実施してきた。

健康診断で私が実際に手伝ったのは、アンケートを翻訳し、本番ではアンケートの手伝いとバスが止まっていた駐車場で子どもたちを順番に並ばせたり、お手洗いの案内などをした。

2009 年から健康診断に体力測定を加え、群馬大学教育学部体育科専攻の学生と一緒に握力、長座体前屈や反復横跳などを測定し、子どもの体力の状態を知ることができた。この活動で、アンケートの翻訳をし、本番ではアンケートに答える場所で子どものサポートをした。

そこで、子どもの健康の状態や体力を計るだけの作業ではだめだということがわかり、継続的な健康維持が必要であり、健康啓発プロジェクトが生まれた。

## 6. 健康啓発プロジェクト

健康啓発プロジェクトは、子どもの健康の状態、体力を知ることだけで終わらないように、子どもに自分の体は自己管理によって変化することを覚えてもらい、子どもが自分自身で健康維持をできるようになることを目指している。

この活動には学校に持っていくための体組成計を準備し、子どもにその機器の使い方や自分の体を知る大切さを説明するためのパンフレットとデータを入力する冊子を PCDC のメンバーが考えて作る作業から始めた。

日本人と比較するとブラジル人は一般的に健康についてあまり興味を持っていない。原因はいくつかあるだろうが、一番は経済的な問題だと思われる。国立病院は混んでいて、私立病院を使用するにはお金がかかるので、病気になってから医者を訪ねるケースが多いと言える。体重を計ったりする習慣はあまりないし、日本より歩数計を使用する人の数も少ないし、料理のカロリーを見ながらその日の食べ物を選ぶ人も特にいない。

### 6. 1. パンフレットと冊子の作成

ブラジルでは多くの方は自宅に体重計をもっていない。体重を計りたいときはドラッグ・ストアへ行く。体組成計はあまり普及していないので、大きいドラッグ・ストアや病院にしかない。

パンフレットと冊子を作るとき、日本語版から始め、小中学校の教科書を基にして考えた。ブラジルでは学校によって、教材もいろいろ違うが、ほとんどの学校では健康についての教科書は使用していないと言える。

まず、パンフレットでは肥満の危険性や睡眠、食事、運動のバランスのとれた生活の重要性を説明することにした。

冊子は子供が体組成計を使いグラフに体重、身長、ローレル指数、体脂肪率を記入し、肥満のチェックができるように作られていて、毎日記入する健康チェック表もついている。ブラジルでは皆、大人も子どもも「BMI」を使い、日本みたいに子ども用の「ローレル指数」という表で区別されていない。

2009年に新型インフルエンザがはやったので、インフルエンザの予防も子どもに伝えることにした。それを作成したのは結城先生の「多文化共生のまちづくりー学生のための仕事術ー」の授業を履修していた学生である。

パンフレットと冊子を翻訳するとき、いくつかの問題があった。「体組成計」という言葉がポルトガル語では専門用語になるので、子どもにわかりやすいように「スーパー体重計」と訳した。ブラジルでは「ローレル指数」と「BMI」の区別がないので、「ローレル指数」は「BMI」と訳した。

日本語版からポルトガル語に訳した結果、ポルトガル語のローマ字の文章のほうが長いので、絵と言葉の間がポルトガル語版では狭くなった。

出版社に送る前にポルトガル語のチェックができなかったので、スペルのミスがあったり、子ども向けの言葉にはなっていなかった部分も出てしまった。子ども向けに書かれたものは易しいけれど、易しいからこそ翻訳が難しいと感じた。

翻訳は言葉をただ日本語からポルトガル語に書き直す作業ではなく、日本語版を作ったときに子どもが興味をもってくれるように様々な工夫をしたように翻訳にももっと時間をかけるべきだったと思った。

## 6. 2. 新型インフルエンザの予防対策

「多文化共生のまちづくりー学生のための仕事術ー」という授業で新型インフルエンザの予防対策を考えた。この授業には日本人、マレーシア人とブラジルの私がいた。

外国では日本と違い、インフルエンザの予防対策はあまり詳しくない。例えば、マスクは使わないし、うがいもしない。手洗いはするけれど、正しい洗い方をしていないとは言えない。子どもに予防対策について教えるために、5つのグループに分かれた：紙芝居班、うがい班、手洗い班、マスク版と妊婦班。

紙芝居班は導入として、予防対策をした子どもとしていない子どもの例を見せながら、予防の大切さを説明した。

うがい班はクイズとうがいのカードを作った。うがいはガラガラとブクブクに分けられること、その二つの方法の順番もクイズで聞くことにした。

手洗い班は手洗いチェックを使って、ばい菌を子どもに見せるようにした。

マスク班はマスクにシールをはることにして、正しい使いかたをやって説明することにした。効果については絵を見せながら、インフルエンザのウイルスがどのように防げるかを説明した。

妊婦班はパワーポイントを使い、妊娠しているときにどのような予防をしたらよいか、そして病院へ行く前の手続きなども説明することにした。

作業をしていてわかったことは、日本人は子どものときからマスクを使うことやうがいをすることに慣れているが、外国人にどうしてそれをするのか、なぜ効果があるのか、いつすればいいのかを説明しようとする、自分もよくわからないということだった。日本でも予防対策が普及しているから、皆正しくやっているとは言えないと思った。子どものころから当たり前だと考えているからこそ、あまり詳しく調べたことがないと言える。

実際に子どもに発表したとき、想像通りにできたことと、意外と子どもがもう知っていたこともあった。

### 6. 3. 在日ブラジル人学校を訪問

健康啓発に参加することができるといった学校は4校だったので、学校を訪問する日程を二日間に分けた。一日に午前中に一校で、午後は他の一校で発表することにした。

発表の順番は、導入班が体組成計の使い方やバランスのとれた生活の大切さについて説明し、記入班は子どもを一人一人計り、冊子にデータの記入の仕方を教えた。全員の子どもを一回で計ることができないので、「多文化共生のまちづくりー学生のための仕事術ー」の学生が、待っている子と終わった子に新型インフルエンザの予防対策を発表した。全員の子どもが計り終わってから、冊子の「毎日肥満のチェック」のシールのはりかたなどの説明を行った。

学校に着いて、最初のショックは想像していたより多くの子もたちがマスクを使っていたことだ。それは、ブラジルではありえないことであるのに、長い間日本で暮らしていると、日本の文化になじんできたからだと考えられる。

子どもとの活動が終わり、先生方にも体組成計の使い方などを説明する必要があり、事後指導のために学校を訪問した。

### 6. 4. 事後指導

ブラジル学校をもう一度訪問し、今度は先生方に体組成計の使い方を見せ、体験してもらい、説明書を届け、記入のしかたも詳しく説明してきた。

各学校に2つの体組成計を預け、マニュアルと冊子やパンフレットを置いておき、2ヶ月後にまた訪問する約束をした。

### 6. 5. 冊子の回収と分析

2ヶ月後、4校の学校で配った冊子を回収してもらい、分析の作業を今しているところだ。回収してくれた冊子の数は配った数より少なかった。

今後の予定は9月の下旬までに分析し、子どもに冊子と結果を返すことだ。

7月にPCDCは滋賀県へ行って、JIAM「地域の外国人児童・生徒への支援セミナー」に参加し、ボランティア活動について発表した。

## 7. JIAM「地域の外国人児童・生徒への支援セミナー」

このセミナーは、群馬大学教育学部教員結城恵氏がコーディネートし、外国人児童・生徒の教育支援について講義や事例紹介等を行い、三重県内の教育現場を見学し、地域として外国人児童・生徒の教育環境をどう支援していくのかについて考えるものであった。

日本全国の方々がセミナーに参加した。期間は4日間で先生の講義を受けたり、学校を見学し群馬と他の地域の外国人の問題、そして問題の解決方法を聞かせてもらった。最終日には、PCDCの二人の日本人の学生と『外国人学校に在籍する子どもたちの「健康」を考える』をいうプレゼンテーションをした。ここで、健康診断、体測定、健康啓発プロジェクトについて発表した。

## 8. おわりに

以上、PCDCの活動、主に健康啓発活動を紹介し、ブラジルと日本の文化の違いには健康だけでなく、日常的、社会的な違いも含まれていることを挙げた。

日本人だからインフルエンザの予防対策に詳しいとは言えない、日本人の大学生も詳しいことは知らなかったことがあるので、日本の子どももよくわかっているか考えなければならないと思った。一方、日本に滞在している子どもはマスクを用いていたので、徐々に日本の文化になじんできていると言えよう。

翻訳についても、体験しないとわからないことが多いことがわかった。例えば、子ども向けの教材は専門用語では通じないし、説明は詳しいほどいいと思った。

以前は当たり前だと思っていたことが実際にボランティア活動を体験し、そうではないということが様々あって、当たり前を崩していかなければ多文化共生は無理だと気付いた。

## <参考文献>

- 1) 八代京子『異文化コミュニケーションワークブック』三修社、2001、p.26
- 2) 初瀬龍平・野田岳人 『日本で学ぶ国際関係論』「外国人法と市民社会」法律文化社、2007、p.131



3) 中川明『マイノリティの子どもたち』明石書店、1998、p.92

4) ウィキペディア

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%97%A5%E7%B3%BB%E3%83%96%E3%83%A9%E3%82%B8%E3%83%AB%E4%BA%BA#.E6.97.A5.E6.9C.AC.E3.81.A7.E3.81.AE.E5.95.8F.E9.A1.8C> (2010年7月18日)